



幽学別れの歌

放浪の前半生を送った大原幽学、

歌を詠むことは多くの人々との交流の手段でもありました。日記には、

折にふれて詠まれた歌・句が膨大に残されています。さて、幽学三十五歳、初めて講義を行った思い出の地、

信州でのこと。次の目的地へ向かうため、見送りにきた友人たちに贈ったのが次の歌です。

わかれても心はかよへ友人の

誠の道の隔てなければ

遠く離れてしまっても、仲間の心は通じ合っている、真実を求める道は誰に対しても分け隔てなく開かれている。「世の中のためになる道に進もう」と決意し、次の地に赴く、寂しくも晴れがましくもある、そんな心情が伝わってきます。

信州の門人たちに別れを告げた幽学は、この後、江戸を経ていよいよ房総の地に上陸とあいなります。農村の指導者として活躍することもまだあずかり知らぬ、幽学の新しい旅立ちのときを、まさに象徴する歌でもあるのです。

一方で、自害というかたちで自ら



の命を絶った幽学は、辞世の歌も残しています。歴史上の人物といえは、通常もつともよく知られているのは、最後の一句だったりしますが、幽学に関してはこの別れの歌が代表的に取り上げられることが多いのです。幽学自身もお気に入りの歌だったとみえて、この歌を書いた短冊が今も多く、多くの門人宅で見つかります。今回紹介した写真もそのうちのひとつ。左は下書き、「実生」は当時の幽学の名前です。

今月から、この旭市で新生活が始まる新入生、新社会人の皆さんにとつて、旭がよき地でありますようエールを送ります。あなたにとつてかけがえのない「ともびと」と「誠の道」を見つけられますように。